これは事實である。もし顏色が黃味を帶びて居れば陰影の一角はブリユーの傾きがある。更にこれを風景に於て見るに、例之は綠色の森の前景から鼠色の遠山を望見すれば、紅色を帶びて見えるもしそれ前景が豐富な黃色の牧場もしくは輝いた砂地であるならば、遠山はヴアイオレツト色を呈するまた前景がブリユーの海水もしくは湖水であるならば、オレンヂ色の調子となる。

また光線の爲めに色彩の調子が變る。かの日沒の暖く紅い光線の下では、綠色が紅色となる。鳶色は黃色に轉ずる。また藍色が、黃色の光線に會ふときは綠色となる、故にかゝる光線の影響は畫面に描くには、大いに注意を拂はなければならない、もしこれを等閑に附すならば、自然界の眞理に反した、激烈な對照を起すに到る憂がある。《色彩應用論滿了》

水彩畫の筆（その二）

筆の毛の軟かいのはいけぬ、水をつけて尖きを曲て見て元の通り跳返る程のがよい、尤も軟かいのを好む人もあり、又寫すべき繪の調子に依て必要の時もあるが、多くの場合には少し力のある筆の方がよい。日本畫を描く筆でも充分使用に耐へるのがある、夏毛で一寸程の穗の長さのあるのがよい、普通の水筆、眞書き方も水彩筆の得られない時は代用することが出來る。

廣い部分を塗る時に刷毛を用ひる人があるが、和製の毛の薄いのでは結果が面白くない、舶來か若くは舶來同樣の毛の厚味のあるのでなくてはいけぬ、太い筆さへあれば刷毛はなくとも濟む、刷毛はあまり用ひぬ方がよいであらう。

海綿筆は輪廓の硬いのをボカしたり、又は暗い處の一部を洗ひ取るのに用ひられるが、これは大きなのは不必要である、海綿を適宜に剪刀で切つて、糸で括り、古筆の軸に押込めはそれでよいので、誰れでも手製で出來る。（つゞく）